英霊に捧げられた花嫁人形（11頁）

環礁

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 FAX 03－3661－8760
振替東京 00100-0-93487
編集兼発行人　佐藤宗丕

平成十年度
慰霊祭 総会 直会の御案内

会長　佐藤宗丕

会員、会友の皆様にはお健やかに平成十年の輝やかしい新春をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭、総会、直会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合わせ、賑々しく御参会下さいますようお待ち致しております。

日　時　平成十年四月五日（日）午前九時

受付場所　靖國神社参集所前

慰霊祭　午前十時　御本殿

定期総会　本年は、靖國会館が工事中のため使用できませんので、会場、議案等は出席を申込みの方に、三月二十日迄に郵便でお知らせいたします。

直　会　慰霊祭終了後九段会館に移動して、正午頃開催します。閉会は二時頃と予定しております。

◎出欠は同封のはがきで、出欠に拘わらず全欄に記入し、二月末迄に到着するよう御投函下さい。

会員名簿訂正に係わる事項は特に正確にお願いします。

◎直会に参加される方は同封のはがきに記入して一人四、五〇〇円を郵便振替でお振り込み下さい。

（以下16頁へ）

目次

平成十年度 慰霊祭 総会 直会の御案内　会長 佐藤 宗丕……1
焼却を免れた靖國神社……井上 武彦……2
キリバス慰霊巡拝の旅……瀧 知道……4
……柚村 栄……6
……椎野とみ子……7
クェゼリン島 慰霊……黒川 正文……8
リィマンマン号 メジャト島に到着……8
陣中日記と戦地の便り……鈴木とみ子……9
春の郷愁……北原ひで子……10
英霊に捧げられた花嫁人形……冨田 ミツ……11
靖國神社秋季例大祭……12
千鳥ヶ淵戦没者墓苑 秋季慰霊祭……13
妻子にあてた最後の便り……菅谷喜代子……14
「戦争を知らない子供たち」……東地井義訓……15
寄付者芳名……15
名簿訂正……15
本部だより……16
会員名簿作成・「環礁」合併本第七集作成・広報委員補充ほか

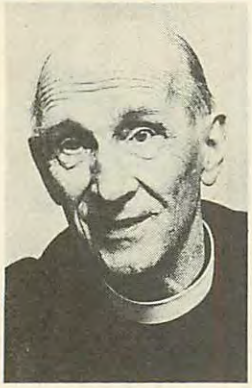
焼却を免れた靖國神社

―終戦秘話―

東京都　井上武彦

今年も暑かった八月十五日、遺族として武道館での終戦記念式典に、初めて参列した。そして近くの靖國神社に大勢の人達と参拝した。まわりには種々な考えの人達が、スピーカーのボリュームを上げていた。当時止むを得ず戦争に参加して、国のために尊い命を捧げた英霊を祀った靖國神社が、戦後GHQにより焼き払われる運命にあったことを知っているであろうか。

数日後、佐藤会長にお会いした時、水交会木山正義会長が昭和五十六年七月号の「靖國」に掲載された「靖國神社とブルーノ・ビッテル神父」の記事を見せられ大変感動した。早速、神父と縁が深く、私にとっては母校である上智大学を訪ね、図書館、資料室できちんと整理された同神父についての資料を見せて貰った。



ブルーノ・ビッテル神父

カトリック・イエズス会司祭、元イグナチオ教会司祭、元上智学院院長ブルーノ・ビッテル神父は、まぎれもなく戦後の日本の運命に大きな影響を与えた、偉大な恩人であった。昭和六十三年一月二十一日、八十九歳で目白の病院で亡くなった。その頃の記事、資料に次のように記載されている。

「在日五十三年、カトリックの布教活動に努めただけでなく、戦前は日米和平交渉の為に働き、戦後は天皇制存続をマッカーサー元帥に訴えるなど、日米間に大きな足跡を残した。」

この事は、昭和四十八年発行、朝日ソノラマ編集部編、「マッカーサーの涙、ビッテル神父にきく」に詳しく記述されている。終戦秘話として「揺れた皇室」天皇制が守られた経過、マッカーサーとトルーマン大統領との関係等大変興味深い内容である。何故、ドイツ人であるビッテル神父がマッカーサー元帥の相談役になり、お互いに尊敬しあい、涙してまで胸の内をうちあける間柄になったのであろうか。

終戦の年のクリスマスから翌二十一年の春にかけて、毎夜のようにGHQの黒塗りの乗用車が、東京四ツ谷駅前上智大学内の大鳥館（元大鳥陸軍大将の旧宅）に横付けになった。東京裁判首席検事キーナン等が通っていたのである。当時そこは在日ローマ法王庁代理大使のビッテル神父と伊藤保秘書役（後教授）の事務室であった。二人共昼間は教会の仕事に追われ、夜はキーナンの他ウェッブ裁判長、米国代表検事ヒギンズも訪れ、三人はビッテル神父から「日本学」の講義を受けていた。話題の中心は天皇制であり、神父は天皇がいなければ日本が大混乱に陥ると熱心に説いた。そして「武士道精神」について、日本人は心の乱れを外に見せないことを徳とする教育を受けている。日本人は自制する修養を積んでおり、何を考えているか分からないと感じている相手だとすれば、その日本人は優れた人物だと判断しなければならない等と、見事に当時の日本人の国民性を喝破していた。当然のことながらこれらのことは東京裁判に影響をもたらしたのである。

ビッテル神父は、明治三十一年十月十四日ドイツ、キール市で生まれ、父親は、晩年最高裁判所判事を勤め、後年ヒットラーに没収された財産等が多くあった名家であった。神父はライプチッヒ大学、オランダイグナチウス大学、英オックスフォード大学に学び、哲学と神学博士の称号をもち、第一次大戦中は陸軍中尉として勇猛果敢に戦い、鉄十字勲章を授与された。この時米軍の中に、後の連合軍総司令部GⅡ（諜報）の最高責任者、ウイロビー少将がいて、これが縁となって二人が固く結ばれたのである。神父は、一次大戦中、英軍の捕虜になり、感じるところがあって聖職者になった。昭和九年の来日前五年間は、アメリカに在住し敗戦国ドイツの資金不足を補うため、アメリカのイエズス会を通じて、上智大学の復興資金の調達に奔走していた。米国滞在中には、ルーズベルト大統領にも会い、彼に請われてヒットラーとも会見している。

来日三年目にカトリック信者であった山本信次郎海軍少将の推挙で近衛文麿首相と会い、「米国の指導者に日本の立場を説明して欲しい。」と要請され渡米した。米国要人に和平外交を行ったが、その努力は近衛内閣の崩壊により水泡に帰した。帰国後、終戦時までは上智学院長として、内外の悪条件下でイエズス会員の生活の維持等に努めた。神父の口癖は「他人に良いことをすることが私の喜びです。」であり、「国家を裁くとすればそれは文明を裁くことである」という不動の信念をもちつづけていた。広島の原爆投下の時は、薬を持って駆け付け、誠意が滲みでる行動であった。終戦にあたり、東久邇内閣からの依頼で帝国ホテルに泊まり込み、連合軍の進駐の受け入れ準備に携わった。GHQを舞台に、日本の再建のために寝食を忘れて敢闘された姿は、神々しいほどであったと、三

十一年間一緒に生活した伊藤教授は述べられている。神父の印象はドイツ人的な堅苦しさが無く、親身になって世話をする長身の聖職者であった。

日本に進駐してきた先遣隊は、帝国ホテルでビッテル神父達に会い、「文明の最後」を招いてはならない。日本には立派な文明があり破壊してはならない、と言われた。そしてラジオを通じて、進駐軍に統制された平和進駐を全世界の眼前で行うことを（軍内の良心）として見守っていることを伝えた。ビッテル神父は、天皇の玉音放送が、全ての日本人に終戦を受け入れさせて、無血の進駐が出来たのだとGHQスタッフに説明したのであった。

トルーマン大統領から日本占領の最高司令官として任命されたマッカーサー元帥のもとには、数多くの政治顧問がいたが、軍人も多く、かつての敵、日本の軍国主義を撲滅すべく次から次へと指令を出した。特高の廃止、治安維持法の撤廃、山崎内相の罷免、新聞の事前検閲の廃止等。当然のことながら靖國神社、伊勢神宮、熱田神宮等が国家神道の中枢であり、誤った国家主義の根元であると信じていたので、焼き払ってしまえという意見が大勢を占めていた。日本国内にも官僚内部や、一部仏教界には強く廃絶を望む者もいた。指導的立場の人々の中にも、国体と皇室が安泰ならば、その他は、忍ばなければならないと考えていた者も多かった。米国政府からは「国家神道は廃止すべきだが、一般民衆の信仰の対象である神道は残しても良い」という訓令を受けた総司令部民間情報教育局（CIE）は、靖國神社等をどう処置するかが決められず、マッカーサー元帥の采配に委ねられた。靖國神社等の存続についてマッカーサー元帥は、ローマ法王庁代表、バチカン公使代理であったビッテル神父達に、キリスト教会の意見を求めた。周りの将校達や、キリスト教神父達は当然神社の全廃を答申すると考えていた。ビッテル神父達の回答は次の通りであった。

答申の要旨

『自然の法に基づいて考えると、いかなる国家も、国家の為に死んだ人々に対して、敬意をはらう権利と義務がある。戦勝国、敗戦国を問わず平等の真理でなければならない。無名戦士の墓を訪ねる各国の首領の行動を見れば自然に理解されるはずである。もし靖國神社を焼き払ったとすれば、その行為は、米軍の歴史にとって不名誉な汚点になるであろう。米軍の占領政策と相入れない犯罪行為である。靖國神社が国家神道の中枢で、誤った国家主義の根源であるならば、廃すべきは国家神道という制度であり、靖國神社ではない。信仰の自由が完全に認められ、神道、仏教、キリスト教、ユダヤ教等いかなる宗教を信仰する者であっても、国家のために死んだものは、全て靖國神社にその霊を祀られる様にすることを進言するものである。』

この答申により靖國神社等は焼き払われなくてすんだ。十一月二十日、靖國神社の臨時大招魂祭は昭和天皇行幸のもと大きな感激を以て厳粛に斎行された。十二月十五日国家と宗教の分離に関する指令（所謂神道指令）が発令され、その思想は現憲法の中に色濃く残されている。

ビッテル神父は、戦前、戦中に多くの人脈をもっていた。日本の近衛首相等の「宮中人脈」に加え、マッカーサー元帥の賓客として招かれたニューヨークのローマ法王に次ぐスペルマン枢機卿を通じてのカトリックのコネの人脈等で、敗戦国ドイツ人でありながらマッカーサーと十一月二十九日初めて面会してから何度かの面談で益々親しくなり、信頼されるに至った。そして最初に「日本人に精神的支柱を支えるために、キリスト教を広めて欲しい」と頼まれた。元帥はカトリック信者ではなかったが、熱心なキリスト教信者であり、軍服を着た法王となり、何千人もの宣教師を来日させ、日本をキリスト教化するための指示を出した。これは共産主義思想排除のためでもあった。その後、聖ザビエル来日四百年記念巡礼カトリック大行進の時、元帥と神父は何の隔たりの無い親友になっていた。

ビッテル神父は、日本の教育界にも大きな足跡を残している。神戸の六甲学院、神奈川の栄光学園を設立し、勿論上智大学の復興に尽くし、イグナチオ教会における開かれた布教活動は申し述べるまでもない。

日本を識りつくしたビッテル神父がいて、マッカーサー元帥の相談役になったことが、わが国に今日の姿をもたらしたことを知り、感無量であり、不思議な力を感じた。

神父は、生前昭和五十年勲三等瑞宝章を受章された。

追記……二十年九月二十七日、昭和天皇はマッカーサー元帥を訪問され、「戦争の責任はすべて自分にある。自分はどうなってもよいから、国民を飢えから救ってほしい」と要請された。

陛下の元帥訪問は十一回に及び、最後は元帥が解任されて離日する前日の二十六年四月十五日であった。

元帥は二十五年にトルーマン大統領に「東京裁判は誤りであった」と告白し、二十六年四月、米上院に於いて「日本が戦争に赴いたのは専ら自国の安全を守るためであった」と証言した。

昭和天皇と皇后は昭和五十年九月訪米の際、宿舎のホテルで故マッカーサー元帥のジーン夫人と歓談された。又元帥の墓前に花を供えられた。これは極めて異例のことであった。

キリバス慰霊巡拝の旅

東京都　瀧　知道

キリバス現地慰霊は、厚生省やマーシャル方面遺族会主催で、度々行われている。今回は、元海軍航空隊員八名と関係遺族十名で編成され、今までとは若干趣きを異にする。そもそも元軍人の方々が企画し、その責任者が、私どもが現地を訪れた際に面倒をみて頂いた郡義典様だったので、遺族にも声をかけて下さったのである。

一行は、平成九年六月十七日にそれぞれ成田、名古屋、関西空港を出発し、グアムで合流、ナウル、タラワ、マジュロ、グアムを経て六月二十九日帰国の十三日間の旅であった。

団長は、海軍第二期甲種予科練習生出身の田中喜作様、副団長は同じく第十三期の郡義典様で、お二人とも当会の会友である。

郡様は、タラワの海員訓練センター（MTC）で六年間教鞭をとり、キリバス事情に精通し、ガイドブック「マウリ・キリバス」の著者でもあり、私どもの満足度は一二〇％であった。

先づ、経路は一般にナウル経由だが、今回は帰路のみをマジュロ経由とした。少しでも多くの箇所にお参りしたいとの希望を満たすためであった。

参拝箇所は、タラワの南瀛の碑、韓国の碑、米軍の碑、豪軍の墓、ブアリキの供養塔、ブタリタリ（マキン）のアイネンカラワ小学校庭の慰霊碑、ケウエアの教会前の慰霊碑、ウキアンガンの小学校庭の慰霊碑等で、それぞれ慰霊祭を挙行した。

今回の慰霊が今までと違うのは、供物やお土産についてもである。郡様の指示で、遺族は主として慰霊祭用の物と在留邦人への土産、元軍人は現地人への土産を中心に用意し、その種類も例示して万全を期された。そのため、千羽鶴、靖國神社の神酒・神水、橿原神宮の神酒、日本の桜の押し花、日本の砂、軍艦旗などが用意され、土産も在留邦人への衣類、菓子、ライター、ボールペン、ノートなど多種に亘り、これを渡すのも、キリバスの習慣により、家長か長老に纏めて渡すことに統一され、私達が個別に渡すのは昵懇な相手に限定された。これが参加する者にとっても気楽であり、大成功であった。

六月二十日タラワに到着直後、レンタカーで南瀛の碑を訪れ、敷地の余りの荒廃に驚いたが、皆一斉に除草作業にかかり、一時間ほどで見違えるように綺麗にした。碑のある公園には、今は鍵がかかっていない。しかし、税関の建設などで現在の敷地は、当初の広さの約四分の一に狭められている。また、手入れが不十分で、回りの金網の一部は倒れており、公園の草は生え放題で、綺麗とは言えない状況である。韓国の碑にも詣でたが、これは、台座が高いので、まだ見栄えがする。

いずれ何らかの補修をしなければと参加者一同は感想を述べていた。

昼食後はベシオの戦跡巡りをしたが、今回は、干潮時にしか見られない日本軍の墜落した飛行機の残骸を見ることにした。

郡様の案内で、田中団長他元軍人五名と遺族三名は、ベシオ南岸の豪軍の墓地裏から海岸に入り、膝まで波に洗われながら、千数百米の沖に向かう。そこには、撃墜された飛行機の残骸が散乱していた。田中団長がこれは、ゼロ戦のエンジン、これは一式陸攻のエンジンと説明してくれた。私は六回目の訪島であるが、始めての経験である。

なかなか行けない所なので、皆エンジンを何枚も写真に収めて帰る。

二十一日のベシオの南瀛の碑前での慰霊祭は、身内だけで心を込めて慰霊しようとの配意から、地元政府関係者等は全く招かなかった。形式的な慰霊祭を脱し、田中団長の「慰霊の言葉」はタラワの上空で共に戦った亡き戦友の名を呼び、涙なくしては聞けない追悼の辞であった。次ぎに靖國神社の神水をそそぎ、日本の桜花の押し花を全員が慰霊碑に撒いた。

ベシオ島の南瀛の碑

夫と一緒に写っている写真を飾り涙する者、自宅の井戸から汲んで来た水を慰霊碑にかける者など、各自それぞれ亡き父、亡き兄を偲んだ。

元軍人の方が用意して、周囲を囲んだ軍艦旗は、慰霊祭の雰囲気をいやが上にも高めてくれた。

元バイリキ郵便局長のブレイモア氏が用意してくれたテーブルに供物がいっぱい載り、誠に盛大な慰霊祭となった。

二十二日早朝、バイリキの手前のアンボから舟で北タラワのブアリキ島に赴く。この旅程はブアリキで旅宿「マウリ・パラダイス」を経営している佐藤恭弘さんに委任した。

ブアリキの供養塔

ここはタラワ玉砕の三日後に、在島の海軍部隊一七五名が玉砕した所で、遺体は住民が丁重に埋葬して下さった。

その位置に、平成六年一月、千葉県八千代市の妙徳寺住職桜井妙義尼僧（桜井良助命夫人）が独力で供養塔を建て、墓守りも居て敷地も周囲の金網等もきれいに管理されていた。

軍艦旗を飾り、供物を供え、団長が般若心経を読む。一同心をこめて御冥福をお祈りし、「マウリ・パラダイス」で中食をとり、舟で帰路についた。

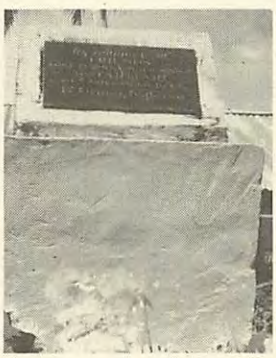
二十三日は、飛行機の都合で、先遣隊だけがブタリタリに飛び、ケウエアとウキアンガンの慰霊碑に参拝した。

ケウエアの慰霊碑は大戦中日本軍の誤爆の犠牲になった現地人を慰霊するため現地人が建立したものである。ウキアンガンの碑は、昭和十九年に建立されているので、郡様が調査したところ米軍の誤爆によるものと判明した。

ケウエアの慰霊碑

しかし、最初に米軍が上陸した場所であり、この戦闘で戦死した日本兵も合祀されているとのことである。アイネンカラワ小学校からトラックで約一時間と離れており、また、この慰霊碑があること自体余り知られていないので、今まで詣でる日本人は皆無であった。

今回は、郡様の案内で、全員ではなかったが、詣でることが出来た。


ウキアンガンの慰霊碑

いずれも、写真のような立派な慰霊碑であり、私達が供物を供へ祈りを捧げていると、近所の方が鐘をついてくれ、荘厳な音が響き渡った。

供物は集まってくれた現地人に頒け大層喜ばれた。

郡様らは、沈没している飛行機の潜水調査をした。飛行機は三機発見されたそうだ。二式大艇と米軍の飛行機それに日本軍の飛行機らしいが形式は認定出来なかったそうである。何時か郡様は再チャレンジすると言われた。

二十四日はアイネンカラワ小学校校庭の天女の像前での慰霊祭である。

この像は、八王子市の故安藤忠夫医師（永生病院長）が寄贈し、昭和六十三年五月に竣工、以後毎年この日に現地人主催の慰霊祭があり、今回も私達は招かれての参加と言うことになる。

現地の五部落住民が集合して村を上げての慰霊祭であり、小学校の庭には、全校生徒が整列し、長老達が椅子に坐って待っていた。

アイネンカラワ（天女）像

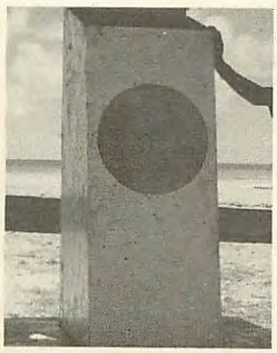
先づ、全校生徒による「北国の春」の斉唱。「白樺　青空　南風」と綺麗な日本語で子供たちが歌うのを聞いていると何故か涙で目が潤んだ。

次に、全校生徒が四組に分かれ、一組ずつ行進して天女の像前で停止。代表二人が花輪と貝で作った大きなネックレスを捧げる。これを四組が行ない、一応慰霊祭は終了。その後、私達は南瀛の碑の時と同じく、供物を供え軍艦旗、千羽鶴などで飾り、十三期甲種予科練の内海博平様が「慰霊の言葉」を述べ、哀悼の意を表した。終了後、近くのマニアバで歓迎の歌と踊り、昼食の接待があり、飛行機の飛ぶ午後三時ぎりぎりまで、歓迎を受ける。

キリバスの踊り子たち

私達は持参した土産を五つに分けてプレゼントしたが、五つの部落からもバナナとバンダナス製の帽子を貰う。

この席で長老達が、故安藤医師の好意を称え、（現在も安藤医師の遺族が毎年十万円寄贈していると言う。）このマニアバをコンクリート床にするこ


日の丸の碑

とと電気をつける支援をして欲しいと言う。田中団長が、個人的に寄付をしたが、安藤医師の遺族が継続して寄付していることに敬服した。また、オノマル部落にアイネンカラワ像より早く現地人により建立された「日の丸」付の慰霊碑があり、これにも詣でた。

二十五日は、日本の援助で運営している漁業訓練センター（FTC）と中央病院を見学した。

FTCの所長は現地人であるが、日本人が三名先生として指導に当たっておられる。笠原岳夫、富塚茂行、青木まゆみの三氏である。

笠原主任の案内で所内を回る。ランゲージ・ラボラトリー室があり、以前駐在しておられた坂本寛様が、海員訓練センター（MTC）からFTCが分離する際、是非ともこの機械はFTCに持って行きたいと言っていたことが成功したことを知り嬉しく思う。

校舎はMTCと比較して見劣りがするが、止むを得ない。旧病院跡を利用しているのだから。それにしても、日本政府は、もっとこのような施設に金を使うべきではないかと思った。

現在は、日本鰹鮪漁業協同組合連合会が実質運営し、日本漁船の乗組員を養成している。この夜は、今まで面倒をみてくれたブレイモア氏宅での招待パーティーに招かれた。

二十六日は午前中ベシオで最後のお参りをし、午後マジュロに向う。

二十七日、マジュロ平和公園の、東太平洋戦没者の碑に詣でる。これは日本政府が、マーシャル諸島とギルバート諸島及びその周辺海域で戦没した人々の慰霊のため昭和五十九年に建立したもので、八千七百万円の国費を投じて作っただけに環境もよく立派なものである。軍艦旗を飾り、供物を捧げ、団長が般若心経を読み、三万余柱の英霊の御冥福をお祈りした。

二十八日、マジュロ離陸、クェゼリン、コスラエ、ポナペ、トラックを経てグアム着陸、投宿。途中、ミレー上空で田中団長が一言「戦争中ここに不時着し、搭乗者七名中四名が戦死した」。……あと暫く無言であった。団長は墜落体験二回とのこと。

二十九日、グアム慰霊公園で、この島で散華された陸海軍二万一千余柱の御霊の御冥福をお祈りする。司令部跡付近に太い竹が繁っており、時折カラン　カランと鳴るのは英霊の語りかけとも聞こえる。

近くでこの付近の戦闘に参加した五二一海軍航空隊員の森本進司様が、戦友の遺体三体を探しあてて荼毘に付しておられた。森本様もその戦友たちにも戦争は未だ終わっていなかったのだ。

昭和十九年七月九日に陸海軍人四万三千人と民間人一万二千人が玉砕されたサイパン島はこの度の日程になかったので、略儀ながら機上で御冥福をお祈りした。

「回天」の乗員として戦場に散った戦友を偲ぶ方など元軍人の方々との慰霊巡拝は、歴史をふりかえる意味からも有意義な旅でした。

全員病気などの事故も無く無事日本に帰ることが出来た。団員十八名中七十才未満は五名という高齢の慰霊団だったが、無事終わったのは、田中団長、郡副団長、それにリーダーとして活躍してくれた方々がいたからであり、心から感謝している。

マーシャル方面遺族会の会員も年々高齢化して現在は佐藤会長以下役員の方々が、献身的に奉仕して下さっているが、これからは若手の遺族に頑張っていただき、遺族全員が子や孫に先の大戦の意義を教え、若くして散った英霊のため、海外に建立してある慰霊碑の維持保存にも努力して頂きたいと思います。（佐七特第一中隊長　滝　千波命の弟）

キリバス友の会　幹事（会報・会計）

キリバス慰霊の旅

岐阜県　柚村　栄

今回タラワ慰霊の旅に参加させて頂きまして、誠に有り難うございました。年寄りと孫共々終始お世話になりました。皆様のご親切なお心遣いには、唯々感謝ばかりでございます。心からお礼申し上げます。

土地の事情に詳しい郡さんの手作りのスケジュールなので、個々の行事にゆとりがあり、臨機応変の替わり身が早いので、安心しておともが出来ました。お国柄、土地柄からの多少のズレは気になりませんでした。

と言うより気にならない様に気配りして下さったのですね。特に最も大切な慰霊祭が丁重に出来ました事、遺族の方々共に感謝し、喜んでおります。

タラワ行が決まってから、折にふれて長女と折り畳んできた「折り鶴」一五〇〇羽を飾る事が出来て喜んでおります。ご一緒の予科練の方々、本当に心優しく、常に気遣って下さいまして、心から感謝しております。ベシオの慰霊碑前迄、何回も車を走らせて下さいました。お陰で充分名残りを惜しんで来る事が出来ました。崩れかけた司令部跡に、在りし日の兄の姿を重ね合わせ、その無念に涙した事でした。

ブタリタリでの盛大な歓迎会は心に残る行事で、大人も子供も村中あげてのせい一杯の催しに心温まる思いでした。校庭に慰霊碑を安置して、慰霊して下さるのはありがたいことです。又、滅多に見られない漁業学校の授業風景、青年達のひき締まった頼もしい表情が印象的でした。ここで頂いた椰子の汁は、とても豊富で美味でした。

日本の援助で建てられたという、中央病院の内部等も見学出来て有意義でした。唯々惜しむらくは日本からの医師や看護婦が、一人もいなかった事で、仏作って魂入れず……の感がありました。いつも郡さんと連絡をとり、案内役をして下さった元郵便局長さんがタラワを去る夜、お別れ夕食会をして下さったのですが、とても美味でした。特にタラワでは見掛けない酢の物があり、聞くところによると、娘さんの味付けで、師匠は郡さんとの事。日・キ料理交流ですね。帰途広い道路迄、雨の中を小さい息子さんが、車の前を走って道案内してくれたのには、島の人達のせい一杯のもてなしをここでも感じました。

雨も止み長い帰り道、降る様な星空の中から待望の南十字星を教えて頂きました。感激！（兄が見た私も見ました南十字星）……駄句。マジュロホテルでの船上パーティーは中々のものでした。外人夫妻の手慣れた接待に、存分に海の夜景を楽しみながら、話に花が咲きました。孫の康史は結構楽しんで、渡井さんから戦争の話等聞いていたようです。

五十年前にこんな所で、命のやりとりの戦争があったなんて想像つかない程、平和な夜の海でした。

未だ思いは尽きませんが、私達は当初、それぞれ心の奥に五十年前の戦争を刻み込み、愛する失った人を慰霊すると言う、込みあげたものを持っての旅でしたが、こうして全員が心の荷を下ろさせて頂きました。これも偏に郡さんの綿密な計画と手配。瀧さんの影の手助け、予科練の方々の思いやり、そしてそれらを広めて下さったのは、田中団長のお人柄だと思いました。又、息子の彰さんは何かにつけて、助言役でお忙しかったと思います。

平素女ばかりの生活なので、こんなにきびきびした予科練の方々の交友関係を、大変羨ましく思いました。孫も初めての旅で多くは話しませんが、得る処が多くあったと確信しております。

皆々様、本当にお疲れ様でございました。お互いに身体を大切にして、又の機会にお会い出来ましたらと思います。どうも有り難うございました。

（三特根付海軍中尉　中村敏雄命の妹）

タラワ慰霊の旅に参加して

徳島県　椎野とみ子

五十四年間想い続けて来たタラワ行に参加させて頂いた事、今も感謝・感激で一杯です。最愛の夫の最後を終えた土地を踏み、風物を見る事が長い間の夢であり念願でした。

彼がどの様な気持ちで、ここで死んだものかと思うにつけても、過酷な運命としか考え様がありません。

五十四年を経た今も飲み水は天水と言う状況ですから、昭和十八年の頃、四五〇〇名の人の飲み水は、どの様にしたのだろうと考えました。どの様な苦労であったかと、想像に余りある感じがしました。補給して貰うにしても限度があるでしょうから……。

タラワのホテルの人達の悠然としていること。天国に近い気がしました。一週間の内、トイレが普通に働いたのは一日で、シャワーの水をタンクに入れる事等、彼等にとっては上等のことの様です。別天地という言葉通りで、又、飛行機も二時間位出発が遅れても、平気なのですから……。

海抜二米の島は、椰子の木やタロ芋位で、花もハイビスカスが所々に見られる位で、夫が押花にして送ってくれたジャスミンなど見かけられませんでした。

この小島に水平線一杯に、敵が来た時には、まだまだ日本の力を信じて、海戦や空戦をしてくれると陸戦隊の人々は期待したのではないかと、哀れでなりませんでした。原爆でも人間は大勢生きているのですから、自決した人が居たのではないかと想像しました。

激戦の五日間がどの様に苦しく、長いものであったかと思います。

十一月二十四日、玉砕前日に激励文と補給物資を投下して下さった、田中団長のお話は身にしみて有り難く拝聴しました。帰る前日に六十六期の花輪が飾られている碑に向かって、「五十四年もここにおられてご苦労様でした。私について帰って下さい。お迎えに来るのが、遅くなって済みませんでした。」と呼び掛けました。

その後お詣りに行った方の話では、花輪はなかったそうですから、確かに私について帰ってくれると信じられ、帰りはルンルンの気持ちでした。慰霊碑付近を掘って、歌集を埋め、その砂を袋に納めました。帰っておいしい水を存分に飲ませてあげようと思います。

帰途トラック島に寄りましたが、第一信がここから来た事を思えば、随分遠くに行っていたのだと痛感しました。皆様のご親切を頂いた事、生涯忘れません。又、ドクターストップが掛かっていた弟、八束が思いがけず参加してくれた事。毎日戦争の深い知識を教えて貰って、タラワの一週間もあっと言う間に過ぎ、身体の故障もなく帰国出来た事は何よりの幸せでした。

下士官以下の日本兵は世界最強である。士官は普通、中枢は最低という米側の評価があると申しますが、予科練の方々の身体と気力の強さには、言い様のない感動をしました。皆様の益々のご健康をお祈り申し上げます。一生に一度の意義深い旅に参加させて頂きほんとうにありがとうございました。

慰霊碑の砂を袋に納めたり
　このの ち共に暮らさんとして

（佐鎮七特陸戦隊副官岡田正命の妻）

クェゼリン島　慰霊

山梨県　黒川　正文

夢にまでみたクェゼリン墓参が現実のものになりました。

平成九年八月十七日朝成田空港で、東京の大高時男様御夫妻、沖縄の宮城幸子様、日通旅行の長谷部課長様と私の五人が勢揃いしました。

十七日はグアム第一ホテルに投宿、十八日はマーシャル方面に台風発生との情報によって二時間程遅れて出発したところ天気は回復し、チュウック（トラック）、ポンペイ（ポナペ）コスラエ（クサイ）を経由し、待望のクェゼリン上空にやってきました。澄みきった空、青い海、風にそよぐ椰子、予想していたよりもはるかにキレイな島でした。五十三年前の惨劇が信じられない静かな島でした。一旦着陸して間もなく飛びたち、マジュロに着いて、ロバートレイマース・エンタープライズホテルに宿泊しました。

翌十九日、大高様の御案内で、今年一月開設された日本大使館に、大高様旧知の三枝代理大使を訪問し、マーシャル諸島の現況や、今後の大使館活動のことなどを伺い、心強く感じました。次に島の中央部に日本政府が、昭和五十九年に建立した東太平洋戦没者の碑にお詣りし、空路クェゼリンに向かいました。

空港にはマリアンヌ・レイン報道官が迎えて下さり、車で全島を一巡してから、本会が昭和四十三年に建立したマーシャル、ギルバート全域の戦没者慰霊碑に案内されました。墓苑内はキレイに整備され、写真で見覚えの赤い鳥居と対照的な風格のある慰霊碑に身のひき締る思いがしました。私どもはそれぞれ故郷から持参したお供物を供え、香をたき、三万余柱の御霊の御冥福をお祈りしました。今の日本の幸せは偏に国難に殉ぜられた英霊のおかげであることを改めて感じ、更に、再び戦争の災禍をうけない世を作るために我々にできることは何かを、私自身に問いかけました。

中央　ドナヒュー大佐

基地司令官コッテル大佐は本国に出張中で、司令官代理ドナヒュー大佐と、レイン報道官が私どもとともに礼拝して下さいました。

フェリーボートでイバイ島（エビゼ）に渡り、アンロハサホテルで汗を流し、冷えたビールで乾杯、ハワイアンバンドを聞きながら夕食をとりました。

二十一日朝、フェリーでクェゼリンに渡り、レイン報道官の御案内で朝食を頂きました。クェゼリン、ルオットの御遺骨送還に格別の御協力を頂いた英子（ヒデコ）・ラポイントさんがおいで下さって附近を案内され、軍専用のレストランで昼食をともにしてからショッピングのアドバイスをして下さいました。その後、東海岸の米軍の墓地にお詣りして、空港まで送って頂きました。

今回はたった五人の少人数なのに、レインさんが、連日御案内下さったのはありがたいことでした。翌二十二日予定どおり無事成田に帰りました。今回の慰霊行を実施して下さった日通旅行の御厚意と、現地の皆様の御親切なお取計いには、感謝の言葉もありません。

私ごとですが、兄の所属部隊を「歩兵四九連隊」と聞いていましたが、会長と、会友の秋元輝夫様の助言により山梨県に調べて貰いましたら「海上機動第一旅団第二大隊、クェゼリン島に於て昭和十九年二月六日戦死」との軍歴証明書」を頂きました。今年は私にとって大層意義深い年になりました。

リィマンマン号　メジャト島に到着

ビキニ環礁での核実験でロンゲラップ島を追われてメジャト島に疎開している島民を支援するため作業船（現地語ブンブン）を贈る運動の第一船が現地に到着し、島民に引渡されました。

リィマンマン号は七月二十八日貨物船で横浜を出港、八月七日にマーシャル諸島共和国の首都マジュロに到着、翌八日、船の引渡しについて、マーシャルと日本両政府間の調印式が、カブア大統領と在マジュロ三枝代理大使の臨席のもとに行われ、翌日マジュロ埠頭で受渡しパーティがあり、十二日出航したがエンジントラブル発生、日本から部品を取り寄せて修理し、八月三十日メジャトに到着、九月一日引渡しを終えました。

九月四日、郡　義典船長（本会会友）とブンブンプロジェクト事務局の清水興生さんは予定期間を遥かに超える四十日間の回航、訓練、引渡しの任務を終え、クワジェリンから空路帰国しました。ロンゲラップの人たちはリィマンマン号でクワゼリンまで送ってくれました。

☆　ブンブンプロジェクトの広報「ブンブン通信」3号より抜粋。

事務局の住所は「環礁」67号にあります。

陣中日記と戦地の便り

茨城県　鈴木とみ子

父鈴木八十次は明治三十九年生まれで大正十五年に徴兵として海軍に入り、昭和四年に満期除隊となり、農業に従事、村役場勤務中昭和十六年十月に三十八歳で召集され、昭和十八年十二月十九日クェゼリン湾で空爆により、乗船昭栄丸と共に散華しました。

子供八人、孫二十三人、曾孫二十八人は皆元気です。昨年十一月子供八人で、念願の現地慰霊を果して二ヶ月経った今年一月に、母が神棚のわきの戸棚の奥から父の陣中日記や母宛の手紙の束を発見し五女の栄子とその夫が中心となって活字化し、慰霊行の記録を加え「南溟の父」と題して製本しました。

次にその一部分を抜きだしてお目にかけます。

（平成九年十月）

陣中日記

〈満期除隊より応召まで〉

鈴木八十次

昭和六年九月十八日満州事変が起こり、昭和十二年七月七日支那事変が始まり、村からも多数の在郷軍人が応召された。その数、現役より出征した軍人を加えて、三百名位あるだろ？……。

昭和十二年十二月十三日、その日は役場に兵事主任として事務をとることになった日である。十二月十日は、前兵事主任　根本豊寿君が応召された日で、自分にとっては大任であると思った。村長から又有志からの切望によって就任することにした。

自分はなぜ自ら任じて恥じだぬ程農家たり老農家たらんと努め、また研究しつつあった農業を犠牲として役場に努めねばならなかったか……。

昭和十二年一月二十四日、在郷軍人分会の副分会長として非常時下在郷軍人会員の指導的存在として立ち、同年七月七日当時北支事変の発端を聞くに及びて、七月十五日より応召開始され、出征在郷軍人の応召慰問、祈願祭、見送りなど相次いで出発する兵士のための銃後運動のために、留守宅家族慰問のために、その年作った八反歩ばかりの稲刈りも基金を作って銃後の活動資金を作りたいと言う部落内女子の手によって刈り取られ、十二月に役場に務める事になるまで自宅の仕事は殆ど出来なかった。

しかも、八月になって分会長芳賀保君出征後は、分会長代理として銃後はますます多忙を極め役場に通う日も多くなってくる。そうした意味で、是非役場にて銃後の務めをして貰いたいとの切なる願いによって、兎に角やって見ることにした……。

それから役場の生活は、三年と十ヵ月は過ぎた。その間の役場の生活を、概略書いてみたい。

午後九時以降に帰宅する日が、まあざっと二ヵ年は続いた。それからは、夜勤は続いている仕事は益々増してくる。分担している事務は、兵事、馬籍、社会、銃後奉公会衛生、警防団、国防研究会、昭和十四年一月三十一日より分会長会参事兼務として。

兵事事務の多忙なところに多賀郡内各町村の公葬に参列する。応召になる迄に十七名もの（寄留者を加えて）戦病死者がある。この連隊葬に参列する。遺骨を捧持して帰郷する。村葬の準備をする。村葬を行う。二十年来あった分会の負債を、参事大塚軍司君と努力して水戸支部の映画会等を開催して、応召家族慰問を兼ねて資金の調達を図り、返済する。分会旗を滝宗作氏の寄付によって更生する。各班旗を帰還兵各位の熱意によって八旗作製。

小川金蔵氏の寄付により、三人分の銃剣防具を買い求める。

とやかくする内に、九月に入る。点呼がある。

予習教育を三日、点呼一日。

十月に入って、補充兵教育四日及び査閲を実施する。十月八日査閲の前日、目出度も又喜ばしき一生の中に比ぶべきものなき、最大の名誉たる充員召集の令状を受け取ったのである。三年と十ヵ月の多忙なり――――

役場の生活に暫く離れて十四日郷里を後に十二年振りの軍隊生活に入るべく横須賀に向かった……。

昭和十六年十月十五日横須賀海兵団入団……。

厳重な身体検査に見事合格して……。

二十人余りの応召員は張り切って晴の任務をお互いに語り合った……。

戦地からの便り

昭和十八年九月二十日

軍事郵便　常夏の国から

佐世保局経由

第四十一海軍軍用郵便所気付

「イ壱七イ四十六」鈴木（省）隊

前略　本年はだいぶ暑かったように郷里の皆様からお便りを受けましたが、今頃内地も涼しい風が吹くようになり、本年の稲作も豊凶を予想さるる頃となったことと思っております。

当地は、最近又青々とした若芽が伸び出して、郊外の外出には、内地の六月頃を想い出す精気が漲っております。日中はこの地の常として、馬鹿に暑い。

この度、自分も内地に転勤を命ぜられ、近く住み慣れた常夏の国を後に、

内地に帰る予定。手紙を受け取る頃は、或いは内地に近づいていることと思う。何れ帰還の上委細ご報告申します。

皆様に宜しく

九月二十日　八十次

やす　殿

この手紙の後、しばらく父からの便りが途切れたことが気になります。時計を反対に廻しても為すすべもなく、手の届かない事への思いで一ぱいです。

（長女　とみ子）

拝　啓

向寒の折柄、皆元気ですか。年末になって、通学に防寒に何程か忙しいでせう。弘子が笑っているのが目に浮かんでくる。保雄も入学準備にうんと勉強する様話してください。府立園藝あたりにでもやりたいと思ふ。からだが大切だから無理をせんやう。抄本は、神戸宛に願ひます。成可くは二通。では又何れ

やす殿

この葉書が最後の便り。

月日は記載されていないが、文面から昭和十八年十一月中旬横須賀で投函されたことがわかります。

春の郷愁

埼玉県　北原ひで子

私は梅の花が好きである。蕾が紅くふくらんで来る頃から、先が白くなってほころびはじめるのを毎日たのしんで眺めている。

梅は長く咲いていて、あとに実がつく故か、散り際は桜のように惜しまれない。一夜の嵐に散り去るような風情も余りないかも知れない。梅林などで数多く咲き揃っているものより、やはり、鄙びた所に一、二本咲いているのがいいと思う。

我が家の二本の梅の木は、いずれも教員をしている長男が転任の際、お別れの記念にいただいたものである。最初にいただいたのは紅梅の幼木で、庭の隅の塀の近くに植えた。余り枝は伸びないが、毎年美しい花をつけてくれる。その後にいただいたのには、白加賀の、一重の上品な花が咲いた。両者共に咲き揃うときれいで、馥郁たる香りをあたりに漂わせてくれる。今年は天候も順調だったので、三月上旬に満開になった。ところが、この梅に異変が起きた。紅梅が白い花に変わったのである。白いと言っても淡いベージュがかっていて、杏の花に似ている。こういうこともあるものか、と家族も皆驚いていた。

近年は両木とも勢いがよくなって、成長するに従い、枝が隣家の庭まで越境して行ったので、直径一、二センチぐらいの枝を切ると、はや青い実が数個くっついていて、可哀相に思った。

小梅を植えたいと思いながら、何年かが過ぎた。去年の秋、浦和の玉藏院の植木市で小梅の苗木が目に止まった。甲州小梅と言われる、菜箸よりやや太めのものであった。梅は仲間の近くへ植えた方がよいと聞いていたので、さきの二本の木の近くへ植えたが、寒さに向かうため活着が気遣われた。

この春、夫が戦死したマーシャル群島、ウオッゼ島へ慰霊に参ることになり、信州の夫の生家を訪れた。夫の好物だった小梅の話が出た時、姪のみ志子さんに、

「うちの小梅を持って行って、ぜひ叔父さんにあげて下さい」

と言われ、うれしく頂いて持って行った。

今、わが家の小梅の木は、元気に若い枝を伸ばしている。この木に成った梅を漬けてみたい。あのみどり児の指先のような、かわいらしい小梅を紫蘇で色よく漬けて、もう一度ウオッゼ島へ行きたい。

川の端に木苺の木が三株ある。これは私が保育園を退職する時、記念に一株いただいたのであるが、数年の間に三株になった。春、どの木々より真っ先に芽吹く。桜の花の終わる頃、白い花が一面に咲いて、初夏にはオレンジ色に色づく。言うまでもなく食用になるが、川の端なので枝が川の方へ傾いており手が届かない。いつの間にか野鳥がこれを見つけて、朝早く飛んで来ては啄んでいる。一羽が止まると、どこからか数羽がかけ降りて来る。

丁度この頃になると、だるまぐみも赤く熟れる。このぐみは小指の爪くらいの大きさで、だるまのように紅く、可愛いえくぼがついているのもある。甘いが、やや酸味と渋味がある。今の子供たちはこのようなぐみなどには見向きもしないが、私の子供の頃はこのようなものを、木に登ってはとって食べたものだ。

この実は野鳥も好み、しきりに啄む。鳥は色の別が分かるらしく、じっと見ていると、紅く熟れたものを食べている。その場で果実をつつくのもいれば、口にくわえて飛び去るのもいる。

傍にすぐりの藪がある。これはさきのだるまぐみと共に、郷里の信州から株分けしてきたものである。背が低く、木にトゲがあって、株になって殖える。緑色の半透明のこの果実は、小型のビー玉のような可愛い玉を、枝にびっしりと並べて垂れる。玉の先には枯れた「花納まり」がくっついていて、これは完熟して紅くなっても最後までついている。

幼い頃、この甘酸っぱい味を好み、痛いトゲに刺されながら、小ザルに摘んだ。

（以下16頁へ）

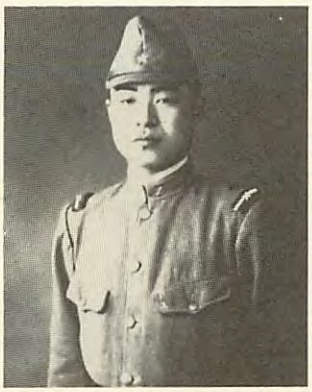
靖國神社の特別展
英霊に捧げられた花嫁人形

若桜の命を小夜嵐に散らしてゆかれた英霊に、母や姉妹達はそのせめてもの気持ちを花嫁人形に託し、神社に奉納されました。

靖國神社では平成九年四月一日より十二月二十三日まで特別展を開催し、拝観する人々は深い感銘をうけました。

本会関係では、冨田ミツさん奉納の花嫁人形等が展示されました。

冨田富榮命



福島県出身　大正九年二月四日生
昭和二十年二月二十八日歿
陸軍伍長　二十五歳

此の度思いがけない幸運に恵まれ、貴方とお話する機会を与えていただき大変嬉しく、長年私の脳裡から離れなかった事を話したいとペンをとりました。

軍服姿で私を訪ねて来てから既に六十年近くなりましたね。さて私がお詫びしなければならない事は、貴方にお金を送って欲しいと言われた事でした。何に使うかも言わなかったので送らずに了い、後で聞いた話では皮の雑嚢が欲しかったとの事、それも知らずに南方に散った事を知り胸が痛みました。この度花嫁人形展を催す事になったとの御連絡を頂き大変嬉しく、貴方の遺品を奉納する事にしました。その中にこのショルダーカバン（展示中）を入れてお送りしますので昔の事はお許し下さい。ラジオの教科書や押花帳、小学校時代に読んだ野口英世の小冊子などをお供え致します。

母存命中は富榮は甘党だからと言って、おはぎや羊かんをお供えしておりました。私も命日には忘れずにお供えしております。南方の戦地には四回行きました。最後は五十回忌を現地でお詣り致しました。もう私は現地墓参は出来ないと諦めています。靖國神社へは君子（妹）と毎年二回必ず会いに行っております。これは健康な限り今後も続ける予定です。

次に貴方の履歴、軍歴については大連引揚時、二、三時間の間に荷物を纏めて集合との命に、大事なものを大部残してきましたので十分に記載することが出来ませんでした。－中略－私も八十二歳になりましたが、祖先をお祀りするためには後継者がいないので頑張らなければと思ってボケないように念願致しております。－中略－春の参拝は三月下旬、マーシャル方面遺族会と夏のみたままつりには、君子と二人で毎年会いに行きますのでお待ち下さい。－中略－昭和二十二年一月下旬、上谷地に引揚げ皆様のお世話になり、私は県庁に勤めて四十六年に退職しました。母は四十一年六月二十八日亡くなり一人になりましたが、君子も一人ですので一緒に生活する事になり、生活は心配することなく過ごしておりますので御安心下さい。母の生存中に家も建てました。石碑も一昨年建替えて、ブラウン島の霊砂をお骨の代わりに葬りました。

明治町の伯母様もこの世を去りました。仏前に手を合わせては富榮さんは立派な息子だったと何時も話しておりました。周水子の妹夫妻も福島に引揚げ、母も喜んでおりましたが、二人共亡くなり、姪、甥四人残っております。末子の一仁は私共によく尽くして呉れるので、私共亡きあとは供養を頼んであります。靖國神社は必ずお参りするよう話してありますので御安心下さい。

それでは四月四日、五日にまたお会いする日を楽しみにしております。どうぞ私達をお守り下さるようお願い申し上げます。

平成九年三月八日

姉　冨田ミツ

冨田富榮様

娶らざる君に捧げん靖國の
宮居に供うる花嫁人形

いで征きし君の姿は凛凛しくて
老ゆるなき遺影は物言う如し

◇　◇　◇　◇

追伸……貴方にお詫びしなければならないことがあります。

それは貴方の戦死の場所と年月日です。公報は、「二十年二月二十八日戦死、場所はタロア島方面」とありましたが、戦友の皆様方は、十九年二月二十四日ブラウン島で玉砕した、と教えてくれました。その他の上官、戦友の方々にもお尋ねしましたがみんな同じ答えでした。

私は宙に浮いている貴方を思い五十年祭までには戸籍を訂正して頂きたいと、あらゆる努力をしましたが、私の非力に加え、法の壁は厚くて私の願いは叶いませんで申し訳ありません。

家では命日をブラウン島玉砕の日と定めてお詣りをしております。

昭和天皇御製

冬空の　月の光は　冴えわたり
あまねくてれり　伊豆の海原

須崎の冬（昭和五十八年）

【十二月拝殿掲示】

靖國神社　秋季例大祭盛大に斎行

参道の樹々が美しく色づき始め、色とりどりの大輪の菊花も咲き香る神苑。

靖國神社秋季例大祭が、去る十月十七日から十九日の三日間に亘り、厳粛かつ盛大に執り行われた。

また、当日祭には勅使の参向があり、天皇陛下からの御幣物が捧げられ、十八日には、皇族方も御参拝遊ばされた。

霊璽奉安祭執行

例大祭奉仕にあたり、湯澤宮司以下全神職は十六日夕刻から参籠に入り、十七日午後三時「清祓の儀」が執行され、大祭奉仕員・神域・諸具を祓い清め、午後七時には浄闇の中、「第百二十二回霊璽奉安祭」が厳かに執行され、新たに十柱の神霊が御本殿正床に奉遷、お祀りされた。

勅使園池美作掌典参向

秋晴れの翌十八日「当日祭」は、午前十時に湯澤宮司以下祭員が御本殿に参進。國學院大學吹奏楽部の奏する「国の鎮」と共に、御内陣の御扉が開かれ、和妙・荒妙をはじめ海川山野の神饌五十台が供せられた。

次いで、宮司が昨夜新たに神霊をお迎えしたことを奉告すると共に、英霊の安らかなお鎮まりと世界の平和を祈念する祝詞を奏上。

十時三十分、参列者一同謹んでお迎え申し上げる中、勅使として園池美作掌典参向。御幣物を奉り、大御心のまに御祭文を奉上、玉串を捧げて拝礼、退下された。

続いて、國學院大學フォイエルコール混声合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼された。その後、宮司は参列者に対し挨拶（割愛）を申し上げ、祭典は滞りなく終了した。

翌十九日の「第二日祭」は、総代をはじめ、全国から参集した御遺族・戦友・崇敬者が多数参列の中執行された。また、午後六時には、祭典の無事終了を奉告する「直会の儀」を執行し、三日間に亘る盛儀は滞りなく終了した。

皇族方御参拝

当日祭の午後一時半、三笠宮寛仁親王同妃両殿下が到着殿に御参着。御小憩の後、御揃いで昇殿、玉串を捧げて拝礼。次いで、拝殿にてお迎えの御遺族・崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

各界代表並びに御遺族・崇敬者参拝

当日祭には、中井澄子日本遺族会会長、堀江正夫英霊にこたえる会会長、工藤伊豆神社本庁統理代理、原多喜三奉賛会会長代理、三輪良雄・小田村四郎・井上實各崇敬者総代をはじめ、各界代表や全国から参集された御遺族・崇敬者七百七十名が拝殿に参列。また、ルーマニア社会主義共和国ダン陸軍大佐も参列された。（以下割愛）

靖濤

月日の経つのは速いもので今年もあとひと月を残すだけとなった。立冬を過ぎてもそれ程の寒さはなく、今年も暖冬になる予報が出ている。ここ数十年来暖冬の傾向は著しく、十二月に都心で雪が降ることは滅多になくなった。また山岳地帯でも降雪量が年々減少しているという。▼こうした気候の温暖化は地球的な規模のもので、その原因が温室効果ガス、とりわけ二酸化炭素の排出量の急激な増加によるものであるという。我々が毎日の生活の中で利用する電車・バス・乗用車等の交通手段、また電気・ガス・水道等のすべてが直接または間接的に二酸化炭素を発生させている。地球の温暖化は自然の生態系を狂わせ、旱ばつや豪雨などの異常気象をもたらすばかりか、海面の上昇により海抜の低い島嶼国を水没させてしまうという。▼今月、地球温暖化防止の国際会議が日本で開催される。温暖化ガス削減には、世界各国の産業界挙げての協力が不可欠である。しかし、国民の一人一人がもっと身近な問題として認識し、〝塵も積もれば山となる〟の諺通り、平素から節電、節水など省エネルギーに努めて行かなければならない。山紫水明の我が国土を、そして掛け替えのない地球を次の世代へと引き継いで行くために。▼師走の声とともに神社では神符守札・破魔矢等の準備や調製など、迎春の諸準備に多忙な毎日が続いている。今年は戦後半世紀が過ぎ、あらゆる面で積弊その極に達し、ひずみが一挙に露呈した多事多難な一年であった。来年こそは平穏な良い年であることを願わずにはいられない。御遺族、崇敬者各位の御健勝を念じつつ、本年最後の稿とさせていただく。（社報『靖國509号』より転載）

千鳥ヶ淵戦没者墓苑　秋季慰霊祭

当奉仕会が主催する平成九年度秋季慰霊祭は、十月十七日（金）、爽やかな秋日和の中、高円宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、内閣総理大臣代理、厚生大臣・環境庁長官・防衛庁長官の各代理、都道府県知事代理、日本遺族会長、各都道府県遺族会・戦友会の代表、統幕議長、陸・海・空各幕僚長、各協賛団体代表、陸海空自衛隊、外国武官、高校生等千数百名が参列し、極めて盛大厳粛に執り行われた。

この日、墓前には、高円宮御下賜の大花籠を中心に、内閣総理大臣他多数の方々からお供え頂いた生花が飾られ、墓前には馥郁たる香りが漂っていた。

定刻の午後一時、航空自衛隊航空中央音楽隊による奏楽のうちに両殿下は御臨場になられた。

式典は、君が代斉唱、献茶の儀に続き瀬島奉仕会会長が別項の式辞を述べられ、参列者一同は戦没者に対する思いを新たにした。

このあと、吉永洲神氏、高松竹龍氏による昭和天皇御製奉誦と由紀さおりさん・安田祥子さんの童謡唱歌奉唱に続き内閣総理大臣の追悼の辞を古川官房副長官が代読されたが、橋本総理の戦没者慰霊顕彰に対する信念を伺い知り参列者は感銘を深くした。

やがて、参列者一同起立するなか、両殿下は墓前に進まれて御拝礼をされ、続いて黙祷を捧げられた。参列者一同も御一緒に黙祷し場内は一瞬静寂な空気に包まれた。御拝礼を終えられた両殿下は遺族席の人々に温い御会釈を賜りながら式場を御退場になった。

続いて自衛隊の代表部隊の参拝、音楽隊の慰霊演奏が行われ、その整斉とした参拝と演奏は、式典を厳粛な空気に引き締めると共に、参列者に対して自衛隊への信頼感を深くするものがあった。

その後、参列者の献花・焼香と続き、式典は午後二時過ぎ無事終了した。

追悼の辞

本日、高円宮同妃両殿下の御臨席の下、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会秋季慰霊祭が挙行されるに当たり、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終わりを告げてから、今日まで五十二年の歳月が過ぎ去りました。苛烈を極めたあの戦いの中で、祖国の安泰を願い、家族を案じつつ、遠い異郷の地において亡くなられた戦没者の方々に対して、ここに心から御冥福をお祈りいたします。

また、あの戦いの中で、多くの苦しみと悲しみを与えることとなった諸国民、とりわけアジアの方々に対しても、深い反省とともに、謹んで哀悼の意を表したいと思います。

戦後、我が国は、焦土の中から立ち上がり、平和を国是とし、幾多の困難を乗り越えて国民のたゆまぬ努力により、目覚ましい発展を遂げてまいりました。

そのかたわらには、家庭の柱である父や子、兄弟を失われたご遺族の方々の並々ならぬ御苦労のあったことを決して忘れることはできません。

そして、この平和で豊かな今日においてこそ、戦没者の方々の尊い犠牲を次の世代に語り継ぐとともに、国際社会において、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久の平和を確立することが、今日、我々に課せられた重大な責務であります。

私は、このことこそが、過去に対する償いとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めることとなるものと信じます。

本日、この式典に当たり、先の大戦から学びとった多くの教訓を改めて深く心に刻み、国際社会において重要な地位を占める一員として、世界の恒久平和の確立と、心豊かに平和に暮らせるより良い社会の実現のため、全力を尽くすことを、ここに改めて誓うものであります。

終わりに、戦没者御遺族各位の御平安を切に祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

平成九年十月十七日
内閣総理大臣　橋本　龍太郎

（奉仕会会報より転載・式辞は割愛）

お尋ねに答えて

毎年外地から多くの御遺骨が帰還されるが、納骨堂の収容能力は？」とのお尋ねがあります。回答に替えて墓苑奉仕会会報（平成三年五月一日発行）を掲記します。

墓苑納骨室の増設

千鳥が淵戦没者墓苑が創建されて以来、三十二年を数えるに至ったが、この間に当墓苑の納骨室に奉安されている御遺骨は逐年増加し、現在三十三万二、八五七柱が奉安されている。

厚生省は引き続き遺骨収集を続けているので、納骨数は今後共増加することが予想されるが、そのためには手狭になってきた納骨室の増設が必要になってきた。

厚生省は予てから対策を検討してきたが、この程六角堂に接した後方に地下納骨室を増設することとし本年初頭より工事に着手し三月二十九日に完成を見るに至った。

この日の竣工式には厚生省岸本援護局長、環境庁伊藤自然保護局長や両省庁の関係課長、谷口建設設計研究所長、施工の竹中工務店代表、更に日常関連の多い熊谷管理事務所長、和田奉仕会理事長等が列席、工事経過報告、岸本局長挨拶、日本遺族会代表の祝辞があって簡素な式を終えた。

（以下14頁4段へ）

妻子にあてた最後の便り

海軍軍属　菅谷寛一　命

昭和十九年九月二十四日
マーシャル諸島マロエラップ島にて戦死
東京都港区飯倉出身　四十五歳

暫らく御無沙汰して居るが、皆変った事もなく達者で居られるが、今後共丈夫で居てくれる様祈る。御身一人で大変であるが多嬉子の一身上は何から何迄一切取きつてやつてくれる様頼む。多忙の為どちらへも御無沙汰して居るが田舎の兄の方へも宜敷伝言してくれる様に、何程の事もなからうが兄と相談の上何事もやれ。

多嬉子、御前様も体を丈夫にする様心がけ、何時も明朗に、母上に従ひ孝養してくれ。母は絶対の物と知れ。少しの不満がましき行ひなすべからず。堅く禁ず。女らしくあれ。

次に貯金通帳の番号を知らせる。軍事郵便貯金通帳艦いか二五一二八号で六百三十五円ある。

中野区鷺宮一丁目四十四番地早野幽香子様より慰問袋を戴いた。礼状は出してあるが、届かないだらうと思ふ。其時の人形は何時も胸に付けて居る。私は非常に嬉しかった。その事を御身から御礼の手紙を差上てくれ。

此際何事も書きたいと思ふが、何も書けない。永い間有難う、是れで御免。さようなら、さようなら

菅谷寛一

菅谷千代様
菅谷多嬉子様

【昭和四十四年九月靖國神社社頭掲示】

遥かな父

東京都　菅谷喜代子

父の最後の便りが靖國神社に掲示されたことは、浮田様から母に電話で知らされました。

父は埼玉県の出身で揉療治の仕事をしておりました。同業者の中で健常者は自分一人だからと代表のつもりで四十四歳で出征したそうです。

母は五十一年に七十八歳で他界しました。父の勲章や手紙などみんな靖國神社へ奉納したそうで、家には父を偲ぶものは何一つも残っていません。

私は母のあとをついで九月二十四日の永代神楽祭には必ずお詣りしております。その時には三番目位に菅谷寛一命と呼ばれます。きっと母が早い時機に永代の手続きをしてあったのだと思います。

兄が二歳で病死しましたので喜代子も早くとられるのではと、両親が心配して姓名判断によって幼い頃は「多嬉子」と呼ばれていましたが、小学校に入ってからは本名で呼ばれるようになりました。しかし父は相かわらず「多嬉子」でした。

父とは職業の関係からか余り一緒にいた記憶がなく、ただおだやかな人柄だけがかすかな印象に残っています。

私にとって父は遥かな遠くの人になってしまいました。

（13頁より）

なお、この工事に相前後して、株式会社間組協賛による墓苑正面参道の敷石補修工事も完成し、墓苑の態勢整備が更に進んだことに感謝されている。

特別弔慰金の請求期限は三月末です

戦没者等の遺族に対する特別弔慰金の請求手続きはお済みでしょうか。

この特別弔慰金は、戦没者等の遺族に対し国として弔慰の意を表すために支給されるもので昭和四十年に創設されました。

平成七年度、新たに法律の改正が行われ、それまでの法律改正で特別弔慰金を支給された遺族に対し、改めて特別弔慰金が支給されるとともに、平成元年四月一日から平成七年三月三十一日までの間に公務扶助料、遺族年金等を受給していた方が死亡等で失権し、年金給付の受給者がいなくなった遺族にも特別弔慰金が支給されることとなりました。

この特別弔慰金は、額面四十万円、十年償還の国債で支給されます。

なお、請求期限は平成十年三月三十一日です。この日を過ぎますと、時効により権利が消滅しますので、手続の終わっていない方は至急、お住まいの市区町村役場で請求手続をしてください。

「戦争を知らない子供たち」

京都府　東地井（トチイ）義訓

青く澄みきった海、群青の空……。太平洋の孤島の厳上に曝された戦車らしい残骸……。その上で遊ぶ子ども達の瞳は空のように明るく輝いている。

カメラを向けると勢いよく手を振ってくれた。

もの云わぬ戦車が、私に何事かを語りかけているように感じられました。

クェゼリン環礁イバイ島の東海岸、平成八年十月十九日、日本遺族会主催マーシャル・ギルバート諸島慰霊友好親善訪問中のひとこまです。

〔事務局付記〕

この作品は、撮影者が、今の日本の平和の恩恵に浸っている人達に是非見ていただきたいとの思いから、財団法人国際文化カレッジ主催の総合写真展に応募したところ、審査員賞に入賞されたものです。

神秘な空と海の群青色を御覧頂けないのが残念です。

四月五日の本会慰霊祭のときは現物を鑑賞して頂けます。

イバイ島（エビジェ島）は、クェゼリン本島の北端から約三、七〇〇米の位置にある小島です。クェゼリンの第六根拠地隊に所属する第九五二海軍航空隊（水上機隊、司令は堀家義一中佐）の約四〇〇名と海軍第四施設部の約四〇〇名が守備し、一部をブラウンとヤルートに派遣していました。

十九年一月三十一日から二月四日までに、六三九トンの艦砲弾と、八七トンの爆弾を討ち込まれた我が軍は必死の防戦も叶わず二月五日全員玉砕、ブラウン派遣隊の一五〇名中、転勤した若干名の搭乗員のほか全員が二月二十三日に玉砕され、ヤルート派遣員は敵が上陸しなかったので三十三名のうち大部分が帰還しました。

環礁「ミレー抄」（21）

会友　成宮芳三郎（第66警備隊軍医長）

爆撃の礁煙をぐらく舞ひしあと
椰子樹倒れて雨細く降る
爆撃機遠く去りたりものいはぬ
体いくつぞ硝煙の切れ間に

寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道　伊藤　フジ　沼山　豊
千葉県　泉水　堯恵
東京都　浜田つき子
神奈川県　平松　菊枝
高知県　田中　百合
福岡県　小林　繁幹
長崎県　香月　正紀

以上は平成九年六月一日から九年十一月三十日までに、寄付された方々八名で、その合計金額は二万二千円でした。

名簿訂正

(13) ◎　平成3年8月15日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
32	泉水　堯恵	〒270－1325 千葉県印西市竹袋155　☎0476－42－2072　戦歿者腰川完　三女（新入会） 戦歿年月日18.12.19　戦歿場所クェゼリン　友成部隊
40	間々田　やす	田島智恵子が継承（長女） 〒189－0001 東村山市秋津町5－16－23　☎0423－94－3539
57	吉見　美津治	〒603－8486 京都市北区衣笠赤阪町1－398　☎075－465－0448　に転居
66	藤原　トシ子	〒226－0013 横浜市緑区寺山町496　☎045－932－5928　に転居
67	金子　庄之助	〒848－0101 伊万里市波多津町辻448－7　☎0955－25－1040　に転居
73	揚野　サツエ	〒898－0023 枕崎市若葉町154　☎0993－73－2303　に転居
76	尾上　一郎	〒663－8165 西宮市甲子園浦風町17－14　☎0798－47－2609（新入会・会友）
77	田中　喜作	〒921－8164 金沢市久安4－47　☎0762－47－6128（新入会・会友）
78	山口　正雄	〒242－0006 大和市南林間1－1－10　南林間一条ハイム802　☎0462－75－6404　に転居

（1頁より）

◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきの所定欄に記入し、料金一人九、九七五円（一泊二食付）を本部にお振り込み下さい。

申込み後の変更や取り消しは直ちに直接左記に電話し、本会にもその旨をお知らせ下さい。

九段会館　宿泊部

〒102-0074　千代田区九段南一－六－五

電話　03－三二六一－五五二一

◎当日は受付付近の混雑が予想されますので、年会費、寄付、直会参加費、九段会館宿泊料、「環礁」合併本代などは、二月中に到着するようお振り込み下さい。当日は参加者の確認だけにしたいと思います。

（10頁より）

いずれも郷愁の果実である。今、一粒口の中に入れて噛めば、ぷつりとつぶれて口内に拡がる。この味が懐かしい。生家のすぐりの藪の傍には、鉄線（クレマチス）の大きな株があり、蔓が傍のヒバか何かの木に巻き付いて、見事な花を咲かせていた。すぐりの味と共に、故郷の家の周りが連想されるのである。今は、家も庭も時代と共に変わり、あの頃の面影は全くなくなってしまった。

靖國神社は
御祭神と最も身近かな私
どもが御護りしましょう

本部だより

☆会員名簿を作り直します

四月五日現在で名簿を新しく作ります。同封のはがきを原稿にしますので特にはっきりと楷書で書いてください。戦歿場所、所属部隊もお忘れなく。

☆「環礁」合併本第七集を作ります

第59号から第68号までを製本し、予約した方に一冊送料共一五〇〇円でお頒けします。予約は出欠はがきに書き入れてください。なお第一集から第六集までの頒布価格も送料共一冊一五〇〇円と改めましたので御了承ください。

☆マーシャル方面の戦没艦船

ルオットのクーロングさんから萩原誠さんに贈られたクェゼリン方面の海中写真集に、日本の軍艦や商船がありました。これらの艦船に縁りの方からのお尋ねに対応するため、マーシャル、ギルバート方面の戦没艦船の資料をお持ちの方又は御存知の方の御協力を得たいと思います。御連絡を頂けましたら幸に存じます。

☆広報委員補充

この度会員井上武彦さんに広報委員を委嘱しました。

☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。

謹賀新年

平成十年元旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	幹事	山口良二
相談役	大給湛子	監事	佐竹エス
会長	佐藤宗丕	同	高橋鎮夫
副会長	黒川誠	篤志会員	徳原徳子
同	畫間樂平	同	長谷川栄次
常任幹事	荒木常子	同	長谷川敏
同	内海淑子	同	松平永芳
幹事	石谷典夫	同	山村要
同	高林芳夫		

マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも会費は一ヶ年二千円で入会金は要りません。

☆事務局よりおねがい

一、会への送金は原則として「郵便振替」を利用ください。申出でのない限り領収証は発行しませんので郵便局の受領証を保存してください。

二、本部への電話は月曜日から金曜日までの午前十時から午後四時までにお願いいたします。

三、FAX番号が三六六一－八七六〇番に変わりました。

☆訂正

① 昭和59年に「環礁」合併本第四集を希望者に頒布しましたが目次集の中に一部誤りがありました。第四集をお持ちの方に訂正用紙をお送りしますのではがきでお申し出下さい。

② 67号16頁「本部だより」の中の「リィマンセン号」を「リイ・マンマン号」と訂正いたします。

本部
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町一－八－二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三－三六六一－八七六〇
FAX〇三－三六六一－八七六〇